

# 保育士養成校における学生の就業意識に関する一考察

—短期大学保育科学生のアンケート調査から—

大津 泰子

A Study on the Carrier Consciousness of Preschool Teacher

Education Students

—From Questionnaire Survey on Students Majoring in Early

Childhood Education Course in Junior College—

Yasuko Ootsu

## Abstract

Japan is still faced with the problem of "children on the waiting lists for daycares", putting working parents in a very difficult situation. One of the reasons of this situation is the shortage of childcare workers of daycares and nursery schools. The rate of turnover and carrier change of childcare works are high. And about 40% of new graduate students in majoring early childhood education chose general office work except for childcare works, according to a survey of a year 2019 by Ministry of Health, Labor and Welfare.

This research is to clarify the carrier consciousness of students majoring in early childhood education course of a junior college. This questionnaire survey focuses on their thoughts about becoming childcare workers and their motivations, furthermore, it analyzes the important elements for entering employment as childcare workers. The result will help to reconstruct program and curriculum for students' carrier development and to raise individual's awareness of responsibility as childcare workers.

**Key words:** Carrier development, Childcare worker, Students majoring in Early-childhood Education

## 1. はじめに

女性の就業率の増加に伴い、保育の利用申し込み率の増加を見込んで、2017年6月に「子育て安心プラン」が公表され、2018年度から2022年度末までに女性就業率80%にも対応できるよう32万人分の保育の受け皿が整備された。また、2017年12月に閣議決定された「新しい経済政策パッケージ」では、これを前倒しして2020年度末までに32万人分の受け皿整備が行われた。

このように、待機児童問題への施策や女性の就業支援として保育の受け皿が整備されていると同時に、保育士の有効求人率も高い数値を示している。2020年5月の保育士の有効求人率は2.18倍で全職種平均の1.10倍と比較しても高い水準で推移している（厚生労働省：2000）。しかし、待機児童問題の課題の一つである現場での全国的な保育士不足は依然変わらないままである。その理由として、資格を取得しても保育職に就かない潜在保育士の問題や早期離職の問題が挙げられている<sup>1)</sup>。

保育士資格を取得する方法として、指定保育士養成施設（以下養成施設）での単位取得と、保育士試験による取得があるが、厚生労働省（2020）によると2018年度の保育士資格取得者数は、養成施設で39,909人、保育士試験全科目合格者数19,483人（地域限定保育士試験含む）と養成施設で保育士資格取得者が約半数を占めている。しかし近年では、養成施設の入学定員の合計は横ばいで、入学者数の合計も微減傾向にある。特に短期大学は、減少傾向にあり、入学定員の充足率は2018年度76.8%（21,567名）、専門学校は59.4%（6,274名0）、一方4年制は88.2%（18,354名）である。

さらに、養成施設を卒業し、保育士資格を有しているにも関わらず、民間企業等に就職する学生も一定数見られる。全国保育士養成協議会（2020）の調査によると、2018年度の養成校全体で保育所に就職した割合の平均値は39.1%であった。2014年度の42.7%から3.6%低くなっている。さらに、養成校の学生が一般職に就くことを決めた理由として、「実習で保育をすることに自信を持つことができなかつたから」が約4割、「給与・福利厚生が充実しているから」約3割である。

養成施設卒業後に保育職に就職しても早期退職、転職するものも多くみられる。それらの要因として、保育現場の低賃金や人間関係、労働環境などについて調査報告されている<sup>2)</sup>。このように養成校の学生の一般職への就職や早期退職などの理由として、労働環境や給与の問題に加え、保育士を目指すようになった理由など個人的な背景、大学・短期大学での経験、実習での経験なども影響していると考えられる。

そこで、本調査では、これから保育園や幼稚園などへの就職を目指す短期大学生を対象に、保育職に関する意識と就業選択の要因に関する意識について調査することにより、保育職を目指す学生の実態と課題について検討する。

## 2. 学生の意識調査の方法

### (1) 調査対象

本学保育科2年に在籍する学生50名（回収率100%）を対象とした。

### (2) 調査期間

アンケート実施日：2020年1月16日（木）

### (3) 調査方法

質問紙は、①保育職に関する意識（取得予定の資格、保育職を目指した理由など）②就職への意識（希望する就職先と内定状況など）③就職先を決める要素④実習と就職の関連⑤保育士として働くことの不安、で構成した。

質問紙を一斉に配布し、その場で回収した。調査は無記名方式とした。倫理的配慮として、研究目的の説明に加え、調査協力は任意であること、回答は無記名として、回答の自由があること、受講している講義とは関係がないことを説明した。また、個人情報の取り扱いについて、プライバシー管理と個人が特定される事はないこと、研究目的以外には使用しないこと、研究結果は学会誌に公表することを説明した。データの取り扱いについては、研究終了後、データは一定期間保管し適切に処分する事を説明した。

## 3. 学生の意識調査の結果

### (1) 保育職に就く意識について

対象者が取得予定の資格は、保育士資格取得者48名（96.0%）、保育士資格と幼稚園教諭二種免許状取得者45名（90.0%）、卒業のみ2名（4.0%）で、9割の学生が保育士と幼稚園教諭二種免許状を取得予定である（表1）。

保育士養成校で保育職を目指した理由について質問した。複数回答で最も多かったのは、「子どもが好きだったから」で約8割を占めている。次に「小さいころから憧れていた」、「自分の保育園・幼稚園の時の先生が優しかった」と続き、比較的早い年齢から保育職を意識していたことがわかる（表2）。

表1 取得予定の資格（複数回答可）N=50

項目	人 (%)
保育士資格	48 (96.0)
保育士資格と幼稚園免許二種免許状	45 (90.0)
卒業のみ	2 (4.0)

表2 保育職を目指した理由（複数回答可） N=50

項目	人 (%)
給料がいいから	0 (0.0)
社会的評価が高い仕事だから	0 (0.0)
資格を活かせるから	12 (24.0)
小さいときから憧れていた	25 (50.0)
自分の保育園・幼稚園の時の先生が優しかった	15 (30.0)
子どもが好きだったから	40 (80.0)
自分に向いているから	4 (8.0)
人にすすめられた	7 (14.0)
家族や親族が保育職だから	7 (14.0)
何となく	0 (0.0)
その他	1 (2.0)

保育士になりたい気持ちについて、入学時と現在でそれぞれ「絶対になりたい」「できればなりたい」「どちらともいえない」「保育士にならない」から選択してもらった。入学時と現在で比較すると、「絶対になりたい」「できればなりたい」と回答した割合は、現在の方が低い結果となった。さらに、「どちらともいえない」「保育士にならない」を選択した人数も増加した（表3）。入学時に保育士になりたいと思った学生の意識が、できる限り卒業時まで維持できるような指導やかかわり方を検討する必要があると思われる。

保育士資格取得について、入学時と現在の気持ちをそれぞれ選択してもらった。入学時と現在では、保育士資格取得を希望する割合に大きな変化は見られず、「絶対取得したい」「できれば取得したい」と答えた割合は9割を超えている（表4）。

前述した「保育士になりたい気持ち」と「保育士資格取得の気持ち」を比較すると、「保育士になりたい気持ち」よりも「保育士の資格取得への気持ち」が高くなっている。保育士になりたい気持ちはあるが、それよりも国家資格である保育士資格取得が保育科志望の主な理由と考えられる。

表3 保育士になりたい気持ち（入学時と現在）N=50

項目	入学時	現在
	人 (%)	人 (%)
絶対になりたい	33 (66.0)	30 (60.0)
できればなりたい	15 (30.0)	12 (24.0)
どちらともいえない	2 (4.0)	6 (12.0)
保育士にならない	0 (0.0)	2 (4.0)

表4 保育士資格を取得したい気持ち（入学時と現在）N=50

項目	入学時	現在
	人 (%)	人 (%)
絶対取得したい	43 (86.0)	41 (82.0)
できれば取得したい	6 (12.0)	8 (16.0)
どちらともいえない	1 (2.0)	1 (2.0)
資格は必要ない	0 (0.0)	0 (0.0)

(2) 就職に関する意識について

調査時点で就職が決定しているのは全体のうち 43 名 (86.0%)、未決定が 7 名 (14.0%) で、8 割以上の学生が就職を決めている。就職が未決定の学生 7 名は、現在「活動中」が 5 名、「働きたいと思った保育施設や幼稚園、施設がなかった」が 2 名であった。

希望する就職先として「私立保育園」が最も多く、続いて「公立保育所」「福祉施設」となり、幼稚園と認定こども園についてはそれぞれ 1 割に満たない (表 5)。

しかし、実際に就職を決めた学生 43 名の施設区分については、表 6 の通りである。「私立保育園」が最も多く、6 割を占めている。表 5 の「希望する就職先」では、12 名が「公立保育所」を希望しているが、「公立保育所」への就職については希望する市町村の公務員採用試験の実施状況なども影響するためハードルが高いと言える。また、雇用形態については、雇用条件が安定している「正規雇用」が最も多い。次に「非正規雇用」「常勤・臨時」と続く (表 7)。

表 5 希望する就職先について (複数回答可) N=50

項目	人 (%)
公立保育所	12 (24.0)
私立保育園	30 (60.0)
認定こども園	4 (8.0)
公立幼稚園	1 (2.0)
私立幼稚園	3 (6.0)
福祉施設 (児童養護施設、障がい児・者施設など)	8 (16.0)
一般企業	2 (4.0)
その他	3 (6.0)

表 6 就職が内定している学生の就職先 N=43

項目	人 (%)
公立保育所	0 (0.0)
私立保育園	28 (65.1)
認定こども園	5 (11.6)
公立幼稚園	0 (0.0)
私立幼稚園	0 (0.0)
福祉施設 (児童養護施設、障がい児・者施設など)	3 (7.0)
一般企業	2 (4.7)
その他	5 (11.6)

表 7 就職が内定している学生の雇用形態 N=43

項目	人 (%)
正規雇用	28 (65.1)
非正規雇用 (常勤・臨時)	13 (30.2)
非正規雇用 (非常勤)	0 (0.0)
アルバイト	0 (0.0)
派遣職員	0 (0.0)
わからない	0 (0.0)
その他	2 (4.7)

卒業後の学生の就業意識について、「卒業後いつまで働きたいか」という質問に対して、「生涯働き続ける」30.0%が最も多く、次に「出産・育児で家庭に入り、育児終了後働く」24.0%、「わからない」22.0%と続いた（表8）。結婚や出産で一時家庭に入るが、育児終了後も働きたいと希望する学生は20名（40.0%）で、生涯働き続ける割合を加えると、全体の70.0%を占める。

就職を考える際に、最も重視する運営主体について（複数回答可）、「社会福祉法人」46.0%が半数近くを占めた。また「気にしない」が40.0%、「市立・町立など公立」10.0%と続く。（表9）。

表8 卒業後の就業意識について N=50

項目	人 (%)
生涯働き続ける	15 (30.0)
結婚後家庭に入る	1 (2.0)
結婚後家庭に入り、育児終了後働く	8 (16.0)
出産・育児で家庭に入る	3 (6.0)
出産・育児で家庭に入り、育児終了後働く	12 (24.0)
わからない	11 (22.0)
その他	0 (0.0)

表9 就職先を考える際に重視する運営主体  
（複数回答可）N=50

項目	人 (%)
社会福祉法人（私立の保育園・施設・認定こども園）	23 (46.0)
学校法人（私立の幼稚園・認定こども園）	3 (6.0)
市立・町立など公立	5 (10.0)
NPO 法人	1 (2.0)
株式会社（企業など）	2 (4.0)
気にしない	20 (40.0)

就職を考える際に、重視する項目として、「賃金」、「認可園」、「無認可園」、「保育方針・内容」など24の項目から複数回答を得た（表10）。「賃金」と「正規雇用」がどちらも58.0%、「保育方針・内容」と「勤務時間」がどちらも48.0%で、これら4項目が上位を占めている。就職が内定している学生の65.1%が「正規雇用」であることや、卒業後の就業意識からも、できるだけ働き続けるためには、賃金や正規雇用、勤務時間といった労働条件が重視されていることが推測できる。

次に「主任や保育士の人柄」44.0%、「職場の人間関係」40.0%では4割を占めている。東京都の調査（2018）でも保育士の退職理由の一つとして「人間関係」があげられているが<sup>2)</sup>、学生の意識としても職場の「人間関係」が円滑であることは就職を決める際の重要な要素となっている。

職場を決めた主な要因について、32件の自由回答が得られた。子どもへの関わり方や保育方針・内容、人間関係などが挙げられた。これらの内容からも、実習や見学を通して職場の雰囲気や人間関係、保育方針などをに共感し、保育職への志望が強くなり、その園を就職先として決めていることがわかる（表11）。

表 10 就職先を考える際に重視する項目（複数回答可）N=50

項目	人 (%)	項目	人 (%)
賃金	29 (58.0)	実習園	5 (10.0)
正規雇用	29 (58.0)	採用の選考方法	4 (8.0)
保育方針・内容	24 (48.0)	家族の意見	4 (8.0)
勤務時間	24 (48.0)	出身園	3 (6.0)
主任や保育士の人柄	22 (44.0)	保護者からの評判	2 (4.0)
職場の人間関係	20 (40.0)	卒業生採用の有無	1 (2.0)
認可園	17 (34.0)	学校の先生の推薦	1 (2.0)
年間休日日数	15 (30.0)	立地条件（駅に近いなど）	1 (2.0)
家から近い	12 (24.0)	無認可園	0 (0.0)
福利厚生（住宅手当・通勤手当、育児休業制度など）	11 (22.0)	非正規雇用	0 (0.0)
園長の人柄	11 (22.0)	研修等の充実	0 (0.0)
預かる子どもの人数	8 (16.0)	その他	0 (0.0)

表 11 職場を決めた主な要因 N=32

・子どもたちの笑顔はもちろん、先生方の雰囲気がとても良かったから。また、行事などを拝見させてもらって、保護者との距離感が良かったから。
・実習に行き、園の雰囲気が自分に合いそうだと感じたから。
・自分が理想とする保育で周りからも人気のある園だから。
・先輩が採用された保育園を見つけ見学に行き、子どもたちに向ける笑顔の表現に憧れたから。
・実習に行かせて頂いた際、先生方が優しく雰囲気がとても良かったから。 ・親戚が通っていて、園の行事などを見て充実していると感じたから。
・出身園だから。
・この園の保育方針や職員さんの働き方に魅力を感じたから。
・実習に行き良かったから。
・きょうだいを通して行事などを見て感動したから。実習で理想の保育を見つけたから。
・保育士になろうと決めたときから、その園で働きたかったから。
・実習に行き、この園で働きたいと思ったから。
・特に理由はなく、知人に勧められたから。
・アルバイトで働いていた保育園がとても働きやすいと思ったから。

・話を聞きに行つて良い印象を持ったから。
・実習に行つて一番自分が成長できたから。
・少人数保育で子ども一人ひとりと関わるができるから。
・自主実習に行かせていただいて、その園の雰囲気良く子どもが伸び伸びと楽しく過ごしていたのと、人間関係良かったから。自分に合っていると思った。
・自分になりたい職場だったから。
・10日間の実習で保育者の方々の優しさや子どもたちへの対応、行事への熱意に感動してここで働きたいと思った。
・福祉施設などで働いてみたいと思ったから。
・実習に行つて良いと思った。
・安定しているから。
・人間関係良かったから。
・家から近い。他の園に比べて給与が高い。
・環境良かった。先生たちの指導が丁寧で良かった。子どもたちが個性的な子ばかりで一緒に成長したいと思った。
・良い環境でとても良かったから。家に近い。
・自分をもっと勉強したいと思える職場だった。これから取得したい資格を取得するため。
・働きやすい場所と感じたから。
・自分が通っていた保育園の先生に憧れ、実習も楽しく行えたから。家に近いから。
・出身園でとても憧れの職場だった。
・園の雰囲気と先生方子どもへの対応などを見て、いいなと思ったから。
・自分に合っていた。

### (3) 保育現場での経験(保育実習等)と就職との関連

保育実習や幼稚園実習が将来の進路を決める上で、7割の学生が「たいへん役に立った」と回答している(表12)。また9割以上の学生が「たいへん役に立った」「役に立った」と回答しており、現場での経験が就職を決める際に役立っているといえる。一方「わからない」と回答した学生3名は、まだ就職が決まっておらず、活動中である。

「たいへん役に立った」「役に立った」と回答した学生46名から、具体的にどのような点が役に立ったか11の項目から複数回答を得た(表13)。

「保育の知識や技能の修得に役立った」54.3%、「保育者になりたいと思う気持ちが強くなった」50.0%、「保育者としての仕事のやりがいを感じた」41.3%が上位を占めている。現場での保育者の保育を観察し、子どもとの関わりを体感することで、実践力や知識の修得につながったと考えられる。さらに、専門職としての「保育士」になることへの意識も高まっていると考えられる。

知識や意識以外にも、「現場の現実を知った」「社会人としてのルールやマナーを学んだ」という回答からも、これから社会人として求められる規範や責任も学んでいることが伺える。

実習と就職の関連についても、「就職先の選択肢として考えられた」19.6%、「就職を勧められた」13.0%と、実習の経験が保育職への就業につながっているといえよう。

表 12 保育現場での経験（保育実習等）  
が将来の進路決定に役立ったか N=50

項目	人 (%)
たいへん役に立った	35 (70.0)
役に立った	11 (22.0)
役に立たなかった	0 (0.0)
全く役に立たなかった	0 (0.0)
わからない	3 (6.0)
無回答	1 (2.0)

表 13 「たいへん役に立った」「役に立った」と回答した理由（複数回答可） N=46

項目	人 (%)
保育者になりたいと思う気持ちが強くなった	23 (50.0)
保育の知識や技能の修得に役立った	25 (54.3)
仕事内容を理解できた	15 (32.6)
保育者としての仕事のやりがいを感じた	19 (41.3)
尊敬できる保育者との出会いがあった	12 (26.1)
現場の現実を知った	16 (34.8)
社会人としてのルールやマナーを学んだ	11 (23.9)
自分の適性がわかった	7 (15.2)
就職先の選択肢として考えられた	9 (19.6)
就職を勧められた	6 (13.0)
その他	0 (0.0)

#### （４）保育士として働く事への不安について

資格を活かして保育士として働くと考えた場合、不安に感じる事を 11 項目から複数回答を得た。「保護者とのかかわり」が最も多く 7 割近くを占めた。続いて「職員内の人間関係」62.0%、「賃金」40.0%、「保育士に向いているか」30.0%、「保育の技術や知識」26.0%となった（表 14）。

「職員内の人間関係」や「賃金」に関しては、就職先を考える際に重視する項目として上位に挙げられていた項目でもある。

最も多い「保護者との関わり」については、現場の実習でも直接関わることが少ない保護者対応である。実習においては、保護者と挨拶をかわしたり、保育士と保護者との関わりや対応を観察することはできるが、それ以上の関わりは難しい。また、保護者より年齢も若く子育ての経験が少ない学生にとっては、就職後に適切な保護者対応ができるか不安が大きいと思われる。

さらに「資格取得しても保育士として働きたくない」と回答した学生は50名中19名であった。このうち、保育園や施設に就職が決定している学生は15名である。19名のその理由（複数回答可）としては、「給料が安いから」13名が最も多く、「実習を通して向いてないと感じたから」4名、「働きたいと思った保育施設や幼稚園が見つからなかった」4名と続く（表15）。資格を取得し保育園等への就職が決定していても、実際には保育士として働きたくない、と考える学生も見られる。短大での経験や家庭環境、経済的理由など様々な要因が考えられるが、学生本人の意思とは異なる選択をせざるを得ないケースといえよう。

表14 資格を活かして保育士として働くと考えた場合、不安に感じる事（複数回答可）  
N=50

項目	人 (%)
職員内の人間関係	31 (62.0)
賃金	20 (40.0)
保護者とのかかわり	34 (68.0)
保育士に向いているか	15 (30.0)
保育の技術や知識	13 (26.0)
子どもとの関わり	4 (8.0)
プライベートな時間が減る	9 (18.0)
体力や精神面	7 (14.0)
将来性	0 (0.0)
家庭との両立	5 (10.0)
その他	0 (0.0)

表15 資格取得しても保育士として働きたくない理由  
（複数回答可）N=19

項目	人 (%)
給料が安いから	13 (68.4)
実習を通して向いてないと感じたから	4 (21.1)
働きたいと思った保育施設や幼稚園が見つからなかった	4 (21.1)
仕事内容が（体力的・精神的に）きつそうだから	3 (15.8)
人間関係がわずらわしそうだから	3 (15.8)
子どもに関わらない、一般企業の仕事に魅力を感じたから	2 (10.5)
長く働ける仕事ではないと思っているから	2 (10.5)
子どもには関わるが、保育士や幼稚園教諭ではない仕事に魅力を感じたから	0 (0.0)
入学時から資格を活かして働こうと考えてなかった	0 (0.0)
その他	0 (0.0)

#### 4. 考察とまとめ

今回の調査結果から、本学保育科の学生の保育職に関する考えられる課題として、第一に、保育士資格取得の目的は維持できても、保育士になりたいという意欲を高め維持することが難しい点である。「保育士」としての専門性や職業意識よりも、資格取得重視の社会背景のもと、資格を取得しておけばいつか役に立つだろうという資格取得のための意識が強く

見られる。それらは単位取得だけの学修姿勢に繋がると思われる。実際に、卒業までに資格や免許状が取得できない、あるいは進路変更をするケースや就職後も早期退職する学生がいることは否めない。保育者に求められる専門性は高くなっており、2年間で保育士としての専門性を養成するあり方が講じられている（大津 2019：32）。

また、保育者養成における学生の就職や進路の迷いに対する対応も必要となる。就職後の不安に「保育士として向いているか」と自分の適性が挙げられ、資格取得しても保育士として働きたくない理由として「実習を通して向いていないと感じた」が挙げられていることから、学校での学びや現場での経験を通して、現実の厳しさを痛感し、保育職への就業意識を低下させていることが伺える。指定保育士養成校の性格として、「専門的職業としての保育士を養成することを目的とし、高等専門職業教育機関としての性格を有する」ものであることが示されている（指定保育士養成施設指定基準）。つまり「保育士資格を取得し、保育現場で働く」ための専門職業教育機関としての役割を持っている。入学時に決めた職業選択を見直し、自分の将来像を再度構築していく作業は、キャリア教育としての視点である。しかし、保育者養成においては、学生が保育職を選択することを前提としながらも、一般職など保育職以外の選択が、学生にとって望ましいものとなるための就職支援も求められる。

第二に実習など現場体験の必要性である。今回の調査から、学生の就職決定には、実習など学外での活動経験がリンクしていることがいえる。実習での体験が将来の自分の保育者像につながり、就業意識にも影響している。さらに、学校生活以外で社会人としてのマナーやルールなどを学ぶ貴重な体験にもなっている。そのため、できるだけ現場での経験を増やす必要があるが、昨年度からの新型コロナウイルス感染によって、本学だけではないが実習やボランティアなど現場での体験機会を確保することが困難な状況である。特に施設における実習では子どもや利用者の感染防止のために実習の受け入れが困難となっている。

さらに、保育者の早期退職、転職は、保育者自身や雇用する側への影響に加え、子どもの心身の発達、人格形成にも影響を与えることになる。そのため、学生が自分にとって望ましい職場で、継続的に専門性を発揮し業務を果たすことができることが重要となる。そのためには、できるだけ学生が現場と関わり、直接保育者や子どもと関わる機会を得て自分の将来像を構築する必要がある。しかし、それらの機会が制限される中、就職に関する情報提供の充実や、動画配信など保育現場とのネットワークを結ぶなど新たな方策が課題となるであろう。

第三に、卒業後も見通した就業支援である。今回の調査結果からも保育士として働く場合に不安に感じるのが、保護者との関わりや職場内の人間関係である。

保育現場では、管理職や中堅職員など多様な人間関係を体験することになる。上司や先輩による指導や注意など、学びの中で葛藤が生じたり、保護者からの苦情、子ども同士のトラブルなどに対応していく力が必要になる。また、施設においては複雑な課題を持つ子どもに合った対応など感情のコントロールやコミュニケーション力も求められる。しかし、それらの力を2年間で育てるには、現在の学生の育った環境や生活経験では十分とは言えない。

（大津：31）

卒業後も、就職先での人間関係や子どもの対応、保護者対応など様々な困難が生じた時に本学のゼミ担当教員やアドバイザーの教員に相談に来る卒業生は多い。卒業生がいつでも気軽に本音で相談できる場所として各教員が対応することは可能である。それに加え、現場での困難や働く事への葛藤などにどのように対処すればよいのか、どこに相談すれば適切な情報、助言が得られるかなど、見通しを持てる発想を身につけさせ送り出すことも必要であろう（高野：41）。また、多様なライフステージに応じた支援も必要であろう。今回の調査では7割近く of 学生は生涯働きたい、また結婚・子育てで離職しても子育て後再就職を希望している。いったん休職や現場を離れても、研修等により専門性を維持できるような、卒業後のキャリア形成に関する適切な情報や助言なども含めた就業支援の体制作りも求められる。

## おわりに

養成施設の入学者数の減少や一般職への就職など、保育職に進む学生数の減少に加え、昨年度からの新型コロナウイルスの拡大により、保育関連の業種も大きな打撃を受けている。これらの状況から今後養成校への入学者や保育職に進む学生のさらなる減少も懸念される。しかしながら、保育士不足の解消のために保育士資格取得を安易にし、キャリア志向が低く早期退職をする保育士が増加することは、保育の質の低下につながる。保育士の質と人材確保の両立を図るための調査研究が今後さらに重要になると思われる。

## 謝辞

今回の本調査にご協力いただいた学生の皆様に感謝申し上げます。

## 《注》

1) 厚生労働省職業安定局「保育士資格を有しながら保育士としての就職を希望しない求職者に対する意識調査」(2013年)では、保育資格を有しながら保育士としての就職を希望しない求職者のうち、保育士としての勤務経験があるものの平均勤続年数は5年未満が半数で、早期離職の傾向も顕著である。

野村総合研究所が全国の保育士資格を持つ20～59歳の女性7,210人に行った「保育士に関するアンケート調査」(2018年)では、67.1%が保育士資格を持ちながら保育士として働いていない「潜在保育士」。そのうち過半数(56.1%)は現在働いていない「非就労」である。

2) 「平成30年度東京都保育士実態調査結果」によると、現在保育士として働いている者のうち、退職意向者の退職意向理由は、「給料が安い」「仕事量が多い」「労働時間が長い」

が上位に挙げられている。また、保育士を辞めた理由として「職場の人間関係」が最も多く、「給料が安い」が2番目に続く。

### 〈引用・参考文献〉

大津泰子（2019）『保育士の専門性と社会的地位に関する一考察』近畿大学九州短期大学研究紀要第49号, 20-36

厚生労働省(2020)『保育士の現状と主な取り組み』

<https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000661531.pdf>

厚生労働省職業安定局（2013）『保育士資格を有しながら保育士としての就職を希望しない求職者に対する意識調査』

全国保育士養成協議会（2020）『指定保育士養成施設卒業者の内定先等に関する調査研究報告書』全国保育士養成協議会

高野亜希子、日野さくら、利根川智子、和田明人（2018）『保育者養成課程におけるキャリア教育の課題－卒業生の動向調査から－』東北福祉大学研究紀要第42号、31-45

田中敬一（2017）『幼児保育学科における就職の実態調査』八戸学院短期大学研究紀要第44巻, 13-20

田中浩二（2015）『保育士及び幼稚園教諭を目指す短期大学生の就職意識に関する調査研究－短期大学生に対するアンケート調査をもとに－』東京成徳短期大学紀要第48号, 35-45

辻富士子、坂本渉（2016）『保育者養成における学生に意識についての一考察（2）－3年間の横断的意識調査の結果を踏まえて－』プール学院大学研究紀要 第57号, 381-391

東京都福祉保健局(2018)『平成30年度東京都保育士実態調査結果』

<https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/kodomo/shikaku/30hoikushichousa.html>

内閣府（2021）『令和3年版少子化社会対策白書』日経印刷株式会社

中川希望（2020）『保育士養成校における就職動向についての研究』函館大谷短期大学研究紀要第34号, 23-31

野村総合研究所（2018）『保育士に関するアンケート調査』<https://www.nri.com/-/media/Corporate/jp/Files/PDF/knowledge/report/cc/mediaforum/2018/forum270.pdf?la=ja-JP&hash=D53503C20C980F5BE5A417FE92448A484BC25E9D>